琴線　令和五年

森野　水琴

巡りあい　久方ぶりの　喜びに
　妙なる調べ　友と聞くらむ

降りてきた　人の言の葉　聞きながら
　忘れた響き　想い出さなむ

おん前で　友と舞いたり　あてやかに
　天も喜び　ひとすじの雨

手のひらに　ひとひらの雪　舞い降りて
　さもひそやかに　ささやきかけむ

ひと冬を　なごりおしみて　降る雪も
　巣立ちをめでて　花となるらむ

別れても　互いの幸を　祈りつつ
　また逢わむとぞ　友に誓はむ

見渡せば　満開の花　咲き誇り
　人の心も　桜に染めむ

おだやかな　春の光に　揺れながら
　鳥の巣立ちを　見て微笑まむ

舞い降りる　桜吹雪に　身をまかせ
　輝く道を　友と歩まむ

待ちわびた　祭り賑わい　華やかに
　初顔合わせ　友となるらむ

激しかる　雨降りしきる　音を聞き
　静かに響く　琴を待つらむ

森にあり　野にもありなむ　水の琴
　天高くまで　奏でられたし

雨あがり　眺むる空に　かかる虹
　さだめの道を　ともに歩まむ

うららかに　ひざしを浴びて　咲き誇る
　秋の桜が　微笑み揺らぐ

生き急ぐ　なかれと風に　教えられ
　力をために　しばし休まむ

言の葉の　続きをいつも　待つ友に
　降りてきたりと　すぐに届けむ

青み増す　薄紫に　祈りつつ
　時の女神よ　逢わせたまはむ

赤み増す　薄紫に　色づきて
　逢いし喜び　心に沁みる

あさぼらけ　そよ吹く風に　揺れながら
　舞い続けるや　草の白露

窓の雪　そこはかとなく　降りつもる
　しおり片手に　響き聞くらむ

やまと歌　文と音とを　友として
　琴の葉奏で　文の花咲く